

概要

- 施設園芸における地域の主要品目であるいちごで、**近年アザミウマ類による被害が課題となっている。**
- アザミウマ類の侵入防止資材（防虫ネット等）および生物農薬の試験を実施することでアザミウマ被害の低減並びに化学農薬の低減と省力化に取り組んだ。
- **地域栽培暦を改定し、グリーンな栽培体系の普及を進めた結果、生物農薬（クメリス）導入面積が4.7haに拡大。**

具体的な成果

1 グリーンな栽培体系の技術周知

- 防虫ネットや生物農薬等各種資材の特徴、使用上の注意点など広く周知できた。

2 グリーンな栽培体系の導入による効果

- アザミウマ類のハウス内への飛来を低減できた



スリムホワイト サンサンネットクロスレッド 生物農薬の放飼（クメリスカブリダニ）

- アザミウマ類対象の**化学農薬成分回数を低減**できた。

R4年産防除実績（収穫開始以降）

慣行（平均4回）→ 導入農家（平均3回）

3 グリーンな栽培体系の普及

- **生物農薬（クメリス）導入面積**

R4年度 2回放飼 188a（うち試験導入75a）

1回放飼 144a

計 332a



R5年度 2回放飼 230.6a

1回放飼 241.5a

計 472.1a

普及指導員の活動

令和4年
～令和5年

- 研修会を活用したグリーンな栽培体系の技術周知（農技センターの研究成果や防虫ネット・生物農薬の特性等について）
- 県央地域農業振興協議会で「みどりの食料システム戦略緊急対策事業」を活用した実証圃の設置（県央いちご部会内の各支部毎）
- グリーンな栽培体系技術を取り入れた栽培暦の改定

令和5年

- 実証圃調査の継続
- 実証圃の成果報告会の開催
- グリーンな栽培体系の普及に向けた技術支援

普及指導員だからできたこと

- ・ 農技センターの研究成果や病虫害発生予察室の情報などを活用しながら現場が必要とする情報を農家へ提供できた。
- ・ 市町をまたぐ広域の部会内で支部毎に実証圃を設置し、JAと連携の上、各地域の特性に応じて技術導入を推進できた。
- ・ 県央地域農業振興協議会で事業に取り組むことで、新たに導入していく栽培技術等について、JA、行政機関等と情報を共有することができた。

グリーンな栽培体系への転換に向けた支援

活動期間：令和4～5年度

1. 取組の背景

県央地域（諫早市、大村市、東彼杵町、川棚町、波佐見町）の施設園芸においてはいちごが最も主要な品目であり、高単収品種「ゆめのか」が栽培されている。一方、「ゆめのか」は灰色かび病、ハダニ等が発生しやすいという特徴があったものの、生物農薬を活用した防除体系の導入や気門封鎖剤、新規登録薬剤等の使用によって、ハダニ類の多発生を抑えることが可能となり、収穫を断念する農家はほとんど見られなくなった。

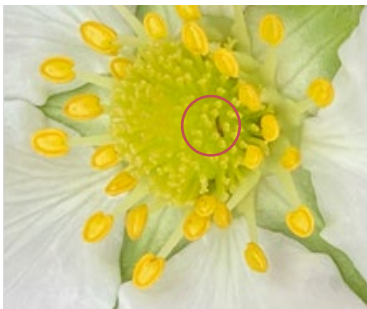
しかし、近年アザミウマ類による被害が問題となっており、現状では化学農薬の防除で対処しているが効果が十分ではない。また、これまで以上に環境に負荷をかけない栽培体系への転換が望まれている。

そのため、すでにハダニ類で生物農薬を防除体系に取り入れた農家を中心に防虫ネット等アザミウマ類侵入防止資材および生物農薬の導入・普及によって、化学農薬の低減と省力化を実現し、化学農薬のみに頼らない効果的なアザミウマ類被害の解決を目指すこととした。

2. 活動内容（詳細）

（1）グリーンな栽培体系の技術周知

- ・研修会の場を活用して、長崎県農林技術開発センターの研究成果や他品目でのアザミウマ類の防虫ネット（スリムホワイト）の効果、アザミウマ類の生物農薬（ククメリスやリモニカ）の特性等グリーンな栽培体系で導入する技術について説明を行い、技術の周知および実証農家の掘起こしを行った。



花に寄生する
ヒラズハナアザミウマ



防虫ネット
(スリムホワイト)



生物農薬
(ククメリス)

（2）グリーンな栽培体系の導入による効果

- ・県央地域農業振興協議会で令和4年度に「みどりの食料システム戦略緊急対策事業」を活用し、JAながさき県央いちご部会内に実証圃を設置し

た。実証を行う技術としては侵入防止対策のためのスリムホワイトのサイド展張、生物農薬はククメリスの11月と2月の2回放飼と、3支部毎に実証圃を設置した。

(3) グリーンな栽培体系の普及（令和5年）

- ・令和4年産のいちごで行った実証圃の結果について、JAいちご部会や県央地域農業振興協議会技術者会の研修会等の場で報告をした。
- ・普及に向けて、農業振興協議会技術者会野菜部会で作成しているいちご栽培暦をグリーンな栽培体系技術を取り入れた暦に改定した。

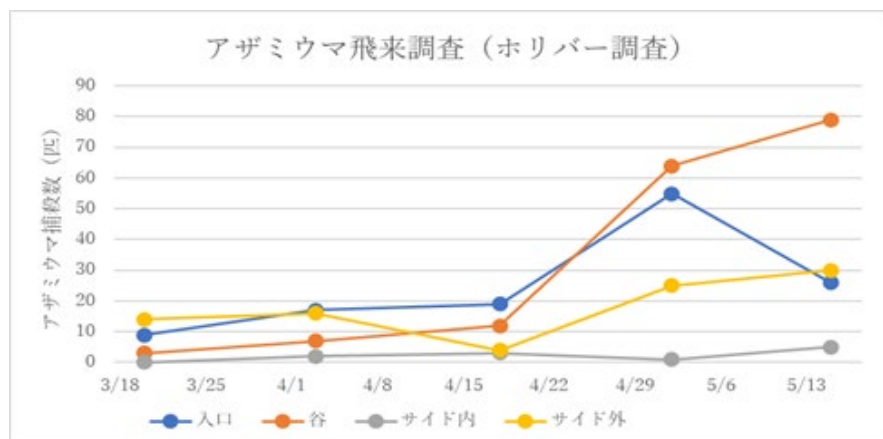
3. 具体的な成果（詳細）

(1) グリーンな栽培体系の技術周知

- ・アザミウマ類の被害で困っており、既に赤色ネットを導入している農家やハダニ類の生物農薬を利用している農家を中心としてククメリスの効果に興味・関心を持ち、実証農家以外でも自力での導入が進んだ。
- ・アザミウマ類の発生状況の確認や密度低減のため、青色粘着板を設置する農家が増加した。

(2) グリーンな栽培体系の導入による効果

- ・スリムホワイトを設置していない谷部や入口からハウス内へアザミウマ類の侵入が確認されたが、設置したサイドについては侵入防止効果が確認できた。



- ・ククメリスについては、成虫は捕食できないが、卵と幼虫を捕食して生息数を減らすため、発生状況を確認しながら防除を行うことで、アザミウマ類を対象とした化学農薬成分回数が低減できた。

R4年産防除実績より（収穫開始以降）

慣行（平均4回）→ 導入農家（平均3回）

(3) グリーンな栽培体系の普及

- ・技術の周知や実証圃の設置により生物農薬（ククメリス）導入面積は増加した。

表 導入面積の推移

導入年度	2 回放飼	1 回放飼	合計
令和 4 年	188a (うち試験導入 75a)	144a	332a
令和 5 年	230.6a	241.5a	472.1a

4. 農家等からの評価・コメント（県央いちご部会員）

アザミウマ類の防除対策として防虫ネットと生物農薬を導入することで、被害および農薬の防除回数を減らすことができた。

農薬散布の作業時間を摘果（花）等他の管理作業に充てることができたので良かった。

5. 普及指導員のコメント（県央振興局大村・東彼地域普及課係長）

ハダニ類の防除対策として生物農薬の導入が進んでいる地区では、アザミウマ類の生物農薬（ククメリス）導入に対する関心も高かった。

現地検討会時に実証農家自らが導入効果について説明したことが普及拡大への後押しとなっている。

今後、アザミウマ類の生物農薬は速効的な効果が見えにくく、成虫を捕食できないが、卵と幼虫を捕食するという特性をきちんと生産者に理解してもらい、防虫ネットや農薬散布等と組み合わせた総合的な防除体系を推進していきたい。

6. 現状・今後の展開等

研修会や現地検討会などを通じて、アザミウマ類の発生状況や防虫ネットの被覆時期、生物農薬の導入時期など適期栽培管理のための情報提供を行いながら、被害および化学農薬の散布回数の低減に向けてグリーンな栽培体系の普及を進めていく。